

## 『源氏物語』における老いの象り方

—「しはぶく」「しはぶき」を手がかりにして—

新井 隆

## 一 はじめに

長編物語作品である『源氏物語』には、帝、貴族、その従者たちはもちろん、さらに下った身分の者たちまで、老若男女様々な人物が登場する。そして、それらの人物たちのうち、少なからぬ者は、身分や性別といった点について言及されてそれぞれ区別されながら語られる。このような区別の観点は、『源氏物語』が成立した西暦一〇〇〇年前後の人々が意識しながら過ごしていたものであろう。たとえば身分については、自他の「身のほど」への言及が多く見られ、たとえば夕霧が六位という位に叙せられたとき、当の夕霧のみならず祖母の大宮も落胆していたし、夕霧の身分を決めた光源氏も六位に叙すというこの意味は認識していた。<sup>(1)</sup>性差についても、清水「一九六七」が注目した「男君」「女君」といった呼称の問題なども含めて様々な語られている。

このような区別のほかに、登場人物たちについて語られる事柄の中では、老いという点においても興味深いものがあるように思われる。重松「一九八三」は『源氏物語』の「老い」という語の用例をすべて検討し、「老い」という語が使われる人物は、多くの場合には年齢が分かる、もしくは年齢が推定できる人物が大部分であり、しかも光源氏に使用される一つの例外を除いて四十歳以上の人物に使用されていることを明らかにした。「老い」という語は、特定の条件を持った人物にのみ使用されているのである。もちろん、「老い」はかなり直接的な表現であり、老いた人にしか使用されないことは自然なことだと思われる。しかし、後で検討するように、他の文学作品では老人以外も行う行為、老人以外にも使用される語であっても、『源氏物語』においてはほぼ老人に限定して使用されるものが見られる。しかも、それらは老いが印象付けられるような表現のありようの中であらわれるのである。

菊地「二〇〇二」が、杖と白髪という肉体的な老いの面に注目し

ながら複数の作品を見わたし、「へおい」の異界性・他者性」を論じているように、複数の文学作品に共通する老いの表象が存在することは確認できる。一方で、作品ごとの老いの表現の固有性については論じられてこなかったと言えよう。『源氏物語』においては多くの老人が登場するが、老いを象る表現は、他の作品と比較するとどのような相違があり、いかなる特徴が見られるのか、といった点についてまだ明らかにされていないことがあると考える。大胡「二〇一九」は、「ライフ・ステージとしての「老い」「老人」化こそ、非流動的かつ非可逆的で固定されているという意味で「人種」化の論理に相当してしまう」と述べている。これは老人というカテゴリーが人々の意識に根づいているということであるが、そのようなカテゴリー意識と表現が結びついている仕組みが『源氏物語』には見られるのではないだろうか。『源氏物語』には『源氏物語』特有の老いのカテゴリー意識があり、それが表現にあらわれているのではないかとこのことを考察していきたい。

もちろん、身分や男女という観点においてもカテゴリーと表現の結びつきを考えていくことは可能ではあるのだが、同じような表現や場面構成が繰り返される点で老いの表現は特徴的なようであり、表現の特質を考えていく対象として老いの表現が適当であると考え、考察の対象としていく。

## 二 老いのあらわれ方

一口に老いといっても様々な面があり、たとえば、肉体的な老い、精神的な老い、年齢を基準にした老いなどがある。桐壺巻の誕生から幻巻の出家直前まで語り手によってその内面が語られていく光源氏は、精神的な老いが語られる箇所が複数あり、池田「一九七八」らの論考もある。しかし、その他の人物の精神的な面での老いが語られることはそれに比してかなり少ない。また、年齢についても各人物の年齢が逐一明示されているわけではない。一方で、見た目や声、行動などにあらわれる老いは、それぞれの場面で非常に分かりやすい形で認識され、表現にもあらわれていることが多いと言えよう。増淵「二〇〇四」では、『源氏物語』、『枕草子』、『徒然草』、『紫式部日記』、『古今和歌集』、『小右記』などに見られる人間の体の種々の老化に言及しており、表現の世界にあらわれる老いというものが多種多様であることが分かる。『源氏物語』という一つの作品を見ても様々な肉体的な面での老いが語られており、永井「一九九五a」はこの点について次のように述べる。

源氏物語では、衰退しかつ過剰な老人の異質性を、まず具体的な身体の変容という記号を用いて描く。目・鼻・口・手・皺の細部、動作で言えば、あくび・いびき・しわぶき・宵まどひ、など、貴族の価値観から外れた有様を繊細に示す。

老いは身体の様々なところにあらわれる。皺などのように老人特有のものは老いを語る際に肉体の老化を示すものとして分かりやすいが、たとえばあくびなどは老人以外も行うものであり、直接的に老いを示すとは言えないものである。あくまでも、老いによる場合もあるといった類のものであり、このようなものは注意深く検討する必要があるだろう。一方で、そのような行為が貴族の価値観から外れた有様を示すという指摘は、『源氏物語』においてそれらの行為に言及されている人物たちを考えると大いに首肯されるところである。

本論では、合図の意味を除いた「しはぶき」、すなわち病や老いによってどうしても出てしまう「しはぶき」をとりあげて考察する。それは、この行為が、老僧、身分がやや劣る老人、もしくは高貴な貴族の者であっても滑稽な者として語られる老人にほぼ限られるからである。外山「二〇〇八」は、「老い」は「その経験に伴う精神的な成熟という肯定的な価値」と「衰退・耄碌という無価値・無効性」が背中合わせになったものだと言及するが、病や老いによりどうしても出てしまう「しはぶき」は、その後者に限って使用されているということである。また、小嶋「一九九五」は、光源氏と藤壺中宮が老いから免れていること、それから若紫の祖母である北山の尼君のように醜悪さを伴わない老人の存在について、物語における意味を考察しているが、同じ老人であっても老いのありようや意味は一括りにはまとめられないのである。その点で、永井「一九九五b」

の、『源氏物語』では「おいびと老人」の語が身分の低い高齡の女房、もしくは横川の妹尼、横川の大尼君にしか使われないという指摘も示唆的である。

ひとまず老いに関する表現について具体的に考察を始めていくが、最初に朝顔の姫君の母親である女五の宮の登場場面を見ていく。女五の宮は老い人としてやや滑稽にも思われるように語られる人物である。この人物を最初にとりあげるのは、女五の宮のその滑稽さの理由が老い人であるという点が見えやすく、老いの表現を考える手がかりになると考えるからである。女五の宮より前にも老い人として滑稽に語られる登場人物は一定数いるが、それらは身分の低い者たちが多く、その滑稽さの理由がどこにあるのか見えにくいと思われる。女五の宮の場合、身分も高く、その滑稽さは老いが主な理由であると考えられよう。

朝顔巻で光源氏が式部卿宮薨去の見舞いに桃園宮を訪れ、女五の宮と会う場面は、次のように語り始められる。

……ほどもなく荒れにける心地して、あはれにけはひしめやかなり。

宮、対面したまひて御物語聞こえたまふ。いと古めきたる御けはひ、しはぶきがちにおはす。このかみにおはすれど、故大殿の宮はあらまほしく古りがたき御ありさまなるを、もて離れ、声ふつつかにこちこちしくおぼえたまへるもさる方なり。

(朝顔 ②四六九～四七〇)

故式部卿邸の哀愁漂う雰囲気に言及があり、それに続いて女五の宮が登場する。最初に「いと古めきたる御けはひ」と年をとっている様子が語られ、続いて「しはぶきがちにおはず」と肉体の面における老いが語られていく。この箇所について、永井「一九九五c」は、「古めきたる御けはひ」という語に注目し、この直後の波線部に語られている女五の宮の姉の大宮の「古りがたき御ありさま」との対照性を論じている。老いを語るのであればその対照性だけでも十分なはずである。それにもかかわらず「いと古めきたる御けはひ」に続いて「しはぶきがち」であることに言及されることには注意が必要ではないだろうか。

なお、この箇所において「古りがたき」と述べられている大宮ではあるが、玉鬘十帖に入ると徐々に老いが語られるようになる。特に存命中最後の記述となる、行幸巻で玉鬘の裳着の贈り物に付けた手紙は、「古体なる御文書き」（御行 ③三一二）であることや、筆跡、歌などが、光源氏によって辛辣な言葉とともに笑われてさえもいる。内親王のように高貴な登場人物の老化が痛々しいほど語られ、そしてそうした高貴な人物の老化がかなり批判的にとらえられている。高貴な人物であるからこそ老い呆けることがゆるされないと、といった考えも見られよう。この点では女五の宮にも通ずるところがあると考えられる。

引用箇所に戻ると、この箇所は光源氏の認識に沿いながら語られており、御簾ごしの対面ということで声に関することが語られてい

ると考えれば自然なことではあるが、「しはぶき」を語る意味を問うていく必要があるだろう。ひとまず、声の老いを示すものとして「しはぶき」が語られていることをおさえておく。

### 三 『蜻蛉日記』、『うつほ物語』、『枕草子』の「しはぶき」

「しはぶき」は、『日本国語大辞典』によると大きく二つの意味に分けられる。一つは誰かに何かを伝えようとする際の合図のようなもので、『源氏物語』では男性が行っており、佐藤「一九八六」も述べるように「声づくり」と重なる意味を持つものである。もう一つは一般的な意味での咳で、たとえば老いや病などにより肉体の衰えから発せられるものである。

『源氏物語』が書かれた西暦一〇〇〇年前後より前の作品で、動詞「しはぶく」・名詞「しはぶき」がどのような人物たちに使用された語であるかを確認すると、たとえば『蜻蛉日記』には、

①かくて、絶えたるほど、わが家は内裏よりまゐりまかづる道にしもあれば、夜中あかつきと、うちしはぶきてうち渡るも、聞かじと思へども、うちとけたる寝も寝られず、夜長うして眠ることなければ、さななりと見聞くこころは、なにかは似たる。

（上巻 一〇六）

②七夕は明日ばかりと思ふ。忌も四十日ばかりになりたり。日

ごろなやましようて、しはぶきなどいたうせらるるを、もののけにやあらむ、加持もころみむ、せばどころのわりなく暑きころなるを、例もものする山寺へ登る。

(上巻 一二五―一二六)

③とばかりありて、おぼつかなく思ふにやあらむとて、いささかしはぶきの気色したるにつけて、「時しもあれ、悪しかりける折にさぶらひあひはべりて」と言ふをはじめにて、思ひはじめけるよりのこと、いと多かり。

(下巻 三三二)

とある。①、③は合図の例で、②は具合の悪い道綱母が咳がひどく出てしまうという記述である。『蜻蛉日記』には、「しはぶく」を二つに大別した意味の両方の例が見られる。

『うつほ物語』では、

①かの木のもとにおはし着きて、しはぶき給へば、子、出で来て見て、……。

(俊蔭 五〇)

②大将うちしはぶき給へば、驚きて、几帳引き寄せ給ひて、この君して、御褥出だし給へば、……。

(楼の上 八三六)

のとおり、合図の意味で二度用いられているだけで、老いや病から発せられる「しはぶく」は見られない。『枕草子』では、

①常よりことに聞ゆるもの 正月の車の音。また、鶏の声。暁のしはぶき。物の音はさらなり。

(二二六―二二七)

②七つ八つばかりなるをの子の、声愛敬つきおごりたる声にて、侍のをのことも呼びつき、物など言ひたる、いとをかし。また

三ばかりなるちこの寝おびれて、うちしはぶきたるもいとうつくし。乳母の名、母などうち言ひ出でたるも、誰ならむと、知らまほし。

(二二四―二二五)

③人映えするもの ことなる事なき人の子の、さすがにかなしうしならはしたる。しはぶき。はづかしき人に物言はむとするに、先に立つ。

(二七二―二七三)

の三例が確認できる。①は、音が普段よりも目立って聞こえるものを挙げる章段で、特にどのような人がする咳かなど、具体的な状況は分からない。ただし、「示されないからこそどのような人物の咳でも想定されうると言えよう。また、ここでは、咳に対する好悪の感情が書かれるのではなく、感じ取ったものを提示するような書き方になっている。②では「寝おびれ」た三歳ぐらいの稚児が「しはぶく」のがとてもかわいらしいと記されており、③では「人映え」するものとして、気がひけるほど立派な人の前で話そうとするときにまず出る咳が挙げられている。③は、声の調子を整える、また緊張をほぐすために出る咳であろうが、これは、女性が男性かを問わず生じる咳だと考えられる。『日本国語大辞典』では二つの意味に分けられていたが、さらに細かく分けるならば、『枕草子』の③に見られる、声を発する前に咽喉を整えるために意識的にする咳も老いや病からくる咳とは分けて考えられよう。ただし、この場合でも、「しはぶき」をしないと声が整わなかったり出なかったりすると、普通の発声はできるが、できるかぎり良い声を出したいという者と

の間には大きな懸隔があるだろう。前者はほぼ不随意の行為であるのに対し、後者はおおむね随意の行為と言えよう。①から③を踏まえれば、『枕草子』では、①の誰か分からぬ人の咳、②の子どもの咳、また③の声の調子を整えるために男女ともに行うことがある咳がとりあげられていた。『源氏物語』が書かれた西暦一〇〇〇年前後より前に書かれた作品では、様々な人の咳が書かれているのである。

#### 四 『源氏物語』の老いの「しはぶき」

『源氏物語』において、名詞「しはぶき」・動詞「しはぶく」という語は、夕顔の死後に光源氏が自身の身の患いの理由を頭中将にごまかす箇所で見られる「しはぶき病」(夕顔 ①一七四)も含めれば、十五例見られる。そのうち、何かしらの合図と考えられるものが六例、「しはぶき病」が一例、その他の八例のうち、老人と考えられる人物によるものが七例で、あとの一例は、「神官の者ども、ここかしこにうちしはぶきて、おのがどちものうち言ひたるけはひなども、ほかにはさまかはりて見ゆ」(賢木 ②八六)という、野宮の風景の叙述において、神官たちがしている記述である。神官という、『源氏物語』ではほとんど登場しないやや特殊な者たちであることには留意が必要であろう。波線部のように、他の場所とは異なる雰囲気であることがことわられており、特異な空間におけるものと言える。

七例の人物達は、佐藤「一九八六」も指摘するとおり、夜居の僧都、末摘花の老女房、女五の宮、源典侍、横川の大尼君が三回というように、老人たちである。

先ほどとりあげた朝顔巻の女五の宮登場場面に戻ると、大宮は老いの子が見られず望ましい様子であるのに対し、女五の宮はそれとは異なって声が太く無骨であると光源氏の認識に沿って語られる。同じ老人ではあるが、老いの子が見られない大宮を望ましく感じ、一方で老いている様子の子の女五の宮にはそのような贅美の心情は抱かず、むしろやや傷があるように感じており、女五の宮の老いが強調されている。

女五の宮が物語で最初に語られる場面では、まず女五の宮が老いている様子が感じられることを語り、それに続いて「しはぶきがち」ということに言及している。声を出す前に咽喉の調子を整えるためであって動作の順番として当然かもしれないが、声の様子を語る前に「しはぶき」をまず語っており、強調されるネガティブな老いの文脈の中で咳への言及がまずあり、咳と老いのネガティブなイメージと結びついていると言えよう。

この少し後に光源氏は再度女五の宮のもとを訪れ、そこからの退出の折、同じ邸内で源典侍と久々の再会をすることになる。老人のもとから退出したところ、また老人があらわれるという構成である。

宮の御方に、例の御物語聞こえたまふに、古事どものそこはかなきうちはじめ、聞こえ尽くしたまへど、御耳もおどろかず、

ねぶたきに、宮もあくびうちしたまひて、「宵まどひをしはべれば、ものもえ聞こえやらす」とのたまふほどもなく、いびきとか聞き知らぬ音すれば、よるこびながら立ち出でたまはむとするに、またいと古めかしきはぶさうちして参りたる人あり。「かしこけれど、聞こしめしたらむと頼みきこえさするを、世にあるものとも数まへさせたまはぬになむ。院の上は、祖母殿と笑はせたまひし」など名のり出づるにぞ、思し出づる。

（朝顔 ②四八二―四八三）

ここでも「いと古めかしきはぶき」とあり、表現のレベルで老いと「しはぶき」とが結びついている。外山「二〇〇五」は、光源氏が女五の宮と最初に会う箇所とこの源典侍登場の箇所をとりあげ、二人の老いの声と「しはぶき」などの周辺の表現について、朝顔の姫君の声を求める光源氏にとって、二人の「声」も話も「雑音ノイズ」でしかないと指摘している。「しはぶき」が老いの声と密接に結びつき、さらにそのネガティブなイメージが物語の構成や展開とも重なっているということである。

また、女五の宮が初登場する場面では老いの「しはぶき」が言及されてからすぐ後、桃園宮への二回目の訪問の際、その女五の宮のものとから退出した場面において、『源氏物語』の中でもそれほど多くは見られない「しはぶく」という語が、「いと古めきたる御けはひ」「いと古めかしき」と似たような表現と連なってあらわれており、両者が同じような性質を持ったものであることが強く印象づけられ

ている。加えて、長く語られることのなかった源典侍の再登場というべき場面であり、その再登場場面において、女五の宮と同じく、何よりもまず咳に言及されているのである。

さらにこの場面の特徴を確認していくと、最初の場面で老いの「しはぶき」が語られていた女五の宮が、この場面でも話の途中から「あくび」をし始め、ついに「いびき」をかきながら寝てしまっており、最初の登場場面に続いて再度老いの衰えが印象的に、もつと言えば滑稽に語られる。続く源典侍も紅葉賀巻で好色な老人という際立った特徴を持った人物として登場していた人物であり、この場面でも波線部のような発言とともに登場する。老人としてやや滑稽に語られる女五の宮、さらに既に物語で滑稽に語られていた老人が連続して登場することにより、老いの滑稽さに注目がいく構成になっている。その滑稽さを結ぶものとして、それぞれの最初の箇所では咳は言及されているのである。

鷲山「二〇〇六」は、朝顔巻の桐壺帝時代を想起させる仕組みを説明する中で、女五の宮と源典侍もその機能を有していると述べている。桐壺帝時代という過去の話を想像させる両者は、まず何よりも特徴的な老いの滑稽さを示す表現において結びつけられており、桐壺帝時代が既に古い昔になっていることが示されるのである。

朝顔巻では過去というものが非常に重要な意味を持っており、光源氏と女五の宮との会話では、光源氏の誕生や須磨流離が話題となっているし、光源氏と朝顔の姫君とのやりとりにおいても過ぎ

去った過去の時間が両者の間に横たわることになる。光源氏が朝顔の姫君に歌を贈っていたことが確認できる帚木巻から十五年経ったが、光源氏はその間も慕っていたのだと朝顔の姫君に言い寄り、一方の朝顔の姫君はかつて関係を持たずに終えたのに今さらどうにもなりはしまいと断るのであって、恋のやりとりの中で過ぎ去った時間の捉え方が両者の間で重要になるのである。

このように捉えたとき、二人の老女と朝顔の姫君には通底するものが横たわっていることが明らかになる。すなわち、女五の宮と源典侍の老いが語られれば語られるほど、過ぎ去った時間の長さが実感されるものとなるのであって、「さるは、いといたう過ぐしたまへど」(朝顔 ②四七四)とも語られる朝顔の姫君と、光源氏との間の懸隔は大きなものになるのである。ここでさらに視野を広げて考えるならば、この朝顔の姫君が盛りを過ぎ、老いに近づいているという理由によつて光源氏を拒絶することは物語の構成上非常に意味のあることではないだろうか。つまり、『源氏物語』における朝顔の姫君への最初の言及は、帚木巻の雨夜の品定め直後で、空蟬よりも早い。朝顔巻の時点で既に亡くなっている葵の上と藤壺を除けば、光源氏に関係する女性の中で最も早く最初に具体的に言及される人物なのである。その女性が「世の末に、さだ過ぎつきなきほどにて、一声もいとまばゆからむ」(朝顔 ②四八五)と自身が盛りを過ぎたことを思つて光源氏を拒否するとき、光源氏と似つかわしいとされる世代の人々が恋をする中心の年代ではなくなつたこと

が明確になり、物語の一つの区切りとなつていく。そのとき、周囲の人物たちの老いがその説得力を高めることになる。しかも、笑いも含むように滑稽に語ることで、物語は深刻さを伴うことなく、静かにその区切りを迎えることになるのである。朝顔巻の老人たちは、そのような役割を持つていたのであって、物語の構成において、老いが語られることの意味は小さくない。

また、朝顔巻の最後に置かれる紫の上との会話の中で、これまで光源氏が関わつた女性たちが会話の中であらわれており、女五の宮が話す光源氏の過去とともに、光源氏の過去が振り返られる巻である。老人の登場は、過ぎ去つた時間の厚みを象徴していると考えられよう。

なお、老人が咳をする記述の前後に老いが印象づけられるような表現が見られるのはこの二人に限つたものではなく、

「今は夜居などいとたへがたうおぼえはべれど、仰せ言のかしこきにより、古き心ざしを添へて」とてさぶらふに、静かなる

暁に、人も近くさぶらはず、あるはまかでなどしぬるほどに、  
古体にうちしはぶきつ世の中のことども奏したまふついでに  
……。

(薄雲 ②四四九)

の箇所に見られるように、藤壺密通事件という過去を伝える夜居の僧都の咳には、「古体に」という修飾があり、その咳が老人特有の類のものであることが語られている。この老僧は、

御わぎなども過ぎて、事ども静まりて、帝もの心細く思したり。

この入道の宮の御母後の御世より伝はりて次々の御祈禱の師にてさぶらひける僧都、故宮にもいとやむごとなく親しき者に思したりしを、おほやけにも重き御おぼえにて、いかめしき御願ども多く立てて、世にかしこき聖なりける、年七十ばかりにて、いまは終はりの行ひをせむとて籠りたるが、宮の御事によりて出でたるを、内裏より召しありて常にさぶらはせたまふ。

(薄雲 ②四四九)

と語られており、薄雲巻までの物語で具体的に年齢が言及された人物としては最高齢で、「終はりの行ひ」のために籠っていたような人物である。「古体にうちしはぶきつつ」の直前の波線部の会話文には、夜の勤めが難しいほど老いていることなどが僧都自身の言葉で語られていることも重要であろう。この人物の老いが語られることにより、かつて藤壺密通事件の傍にいたことの説得力が増すのであり、物語において重要な言及だと言える。一方で、やがてこの老僧も消え、藤壺密通事件を近くで知る者もいなくなることが予感される表現とも考えられるものである。

また、末摘花の老女房については、次のような表現のありようになっている。末摘花の邸の近くを通った光源氏が末摘花のことが気になり、まず惟光が知り合いの女房である侍従の君を探しに末摘花の住む邸の中に入っていく場面である。

惟光入りて、めぐるめぐる人の音する方やと見るに、いささか人げもせず。さればこそ、往き來の道に見入るれど、人住みげ

もなきものをと思ひて、帰り参るほどに、月明くさし出でたるに見れば、格子二間ばかりあげて、簾動くけしきなり。わづかに見つけたる心地、恐ろしくさへおほゆれど、寄りて声づくれば、いともの古りたる声にて、まづしはぶきを先にたてて、「かれは誰ぞ。何人ぞ」と問ふ。名のりして、「侍従の君と聞こえし人に対面たまはらむ」と言ふ。「それは外になんものしたまふ。されど思しわくまじき女なむはべる」と言ふ。声いたうねび過ぎたれど、聞きし老人と聞き知りたり。

(蓬生 ②三四五―三四六)

この場面では、邸内に入った惟光は、「人の音する方やと見る」のように人の物音がする所はないかと、音に注意しながら探り進んでいる。簾がうごく気配がしたところで惟光が咳払いをしたところ、中からまず咳が聞こえ、それに続いて老女房の声が聞こえてくるのである。

まず「いともの古りたる声」という表現で老女房であることが想像され、それに続いて「まづしはぶきを先にたてて」と咳に言及する。咳を「まづ」「先にたて」なければならぬほど老いているということであり、やはり「しはぶき」が老いの声と結びつく形であらわれている。そして惟光への返事の声について「声いたうねび過ぎたれど」とあり、最後にその人物が、知っている「老人」であることが明かされる。この場面では老いを感じさせる言葉が繰り返用いられているのであるが、その中で「しはぶき」という語が使用

されていることは、この語が老いを明確に特徴づける語の一つであることと不可分には考えられないものである。

また、ここでの惟光の「声づくれば」とは咳払いであるが、中から聞こえてくる「しはぶき」は老いゆえの咳であり、似たような行為であるからこそ両者の差が明確になる。この女房は、惟光が末摘花が住む邸のことを光源氏に報告する際に「侍従がばの少将といひはべりし老人」（蓬生 ②三四七）と呼ばれている人物で、末摘花が最も信頼を置いていた女房である侍従の「をば」である。ただし、末摘花邸の女房たちの記述については、この場面の直前に、年ごろわびつつも行き離れざりつる人のかく別れぬることを、いと心細う思すに、世に用ゐらるまじき老人さへ、「いでや、ことわりぞ。いかでか立ちとまりたまはむ。我らもえこそ念じはつまじけれ」と、おのが身々につけたるたよりも思ひ出でてとまるまじう思へるを、人わろく聞きおはす。

（蓬生 ③三四二～三四三）

とあり、老人は他の出仕先を見つけることが困難であることが述べられていた。侍従が邸からいなくなり、咳をまずしてからでないと言声が出ないような老人が応対せざるをえない末摘花の邸の状況が、二つの咳によって明確に浮かび上がるのである。特にこの箇所のお女房は、「いと」「いたうねび過ぎ」といった言葉で一層老いが強調されており、末摘花邸の荒廃と没落を一層印象づけ、末摘花への同情を誘う表現にもなっている。

## 五 横川の大尼君の「しはぶき」

物語中で老いによる咳をすることに言及される最後の一人である横川の大尼君も確認しておく。

この大尼君、笛の音をほのかに聞きつけたりすれば、さすがにめででて出で来たり。ここかしこうちしはぶき、あさましきわななき声にて、なかなか昔のことなどもかけて言はず。誰とも思ひわかぬなるべし。「いで、その琴きんの琴弾きたまへ。横笛は、月にはいとをかききものぞかし。いづら、くそたち、琴とりてまゐれ」と言ふに、……。（手習 ⑥三二八～三二九）

この大尼君には、「いと古めかしき」や「古体に」のような言葉は見られない。ただし、直後に「わななき声」とあり、これまでよりも一層老いた声と結びつくように語られている。この大尼君の場合、同じ手習巻の冒頭に「八十あまりの母」（手習 ⑥二七九）とあり八十歳を超えることが既に示されていた。『源氏物語』で年齢に言及される登場人物で最も高齢である。それは、「ここかしこ」という咳の多さということと繋がってくるものである。さらにそれに続いて、「なかなか昔のことなどもかけて言はず」とある。この語り手の言葉は、大尼君が、老人にもかかわらず老人の典型とは異なって楽器の話をすることを述べるものである。老人であることを前提にした言葉だと言えよう。気持ちの若さが見られるようにも思われ

るが、この直後に「誰とも思ひわかぬなるべし」と、人の見分けがつかないほどになっていると語られており、対比的な表現により、むしろ老いの滑稽さが際立つように表現されている。「しはぶき」に付いている「ここかしこ」は、賢木巻の神官たちと重なる表現であるが、神官たちは複数の人間で、しかも神域という特殊な環境で厳かなふるまいを求められる者たちであった。しかし、この大尼君の場合、一人の人間が目立って咳をしており、しかもこれまでの人物の老いによる「しはぶき」が、「しはぶきがち」、「まづしはぶきを先にたてて」といった程度であったのと比べると段違いに多い。『源氏物語』の登場人物で年齢が語られる者の中で最高齢の人物が最初に声を発するとき、これまでの老人以上に非常に咳が多いということを語り、さらにその直後に老いに関する表現を積みかけており、ここでも咳は老いの一つの形として捉えられているのである。しかもそれは今までの老いとは異質とも言えるほどのものであった。『枕草子』では話し始める前に咳をする人が挙げられていたが、それは貴人などの前で話す際に声の調子を整えてより声を美しくするために行うもので、多様な人々が想定されるものであった。さらに言うならば、おそらく貴人の前で話す女房や貴族の男性を想定するものであっただろう。これらは意識的とも無意識とも言えるものであるが、『源氏物語』の「しはぶき」の場合にはほぼ老人に限定されている。それらは、「しはぶき」がなければ整った発声ができず、声を出す際に自然と行うもの、そしてする必要があったもの

なのである。また、ここまでとりあげた場面では、老人の声の様子の紹介にあたる箇所と言及されており、「しはぶく」が老人の声、すなわち老いの声に付随するものの典型の一つとして位置づけられているのであり、換言すれば、物語世界において老いを形づくる役割を持つ語であったと考えられるのである。さらには、登場してすぐに「しはぶき」に言及されていることで、この語が持つ老いのイメージによって登場人物たちの老いが示されることになるのである。この大尼君の咳はその後二回言及される。

「いで、主殿のくそ、あづまとりて」と言ふにも、しはぶきは絶えず。  
(手習 ⑥三三〇)

一つ目の場面と同じ場面の中で二回目と言及もある。人々の楽器の演奏に気持ちが乗り、自分が弾くための琴を持つてくるように促しながら咳をし続ける。咳がずっと続いており、他の老人たちが話す前に声をととのえるためとも思われる「しはぶき」であったのに対し、『源氏物語』の登場人物の中でも特に高齢である大尼君の「しはぶき」は、より一層多くなり、話の間にもずっと続き、語り手にも再度言及されるのである。さらに、

夜半ばかりにやなりぬらんと思ふほどに、尼君しはぶきおほほれて起きにたり。灯影に、頭つきはいと白きに、黒きものをかづきて、この君の臥したまへるをあやしがりて、鼯とかいふなるものがさるわざする、額に手を当てて、「あやし。これは誰ぞ」と、執念げなる声にて見おこせたる、さらに、ただ今食ひてむ

とするとぞおほゆる。

(手習⑥三三〇)

という三例目に至っては、他の例と異なり、声を発するためということではなく咳によって起きてしまうということが語られる。ここでは、老いによる衰えに対応できず、老いの咳によって眠りさえ妨げられているのであって、老いが人間を脅かす姿が語られていると言えよう。「しはぶく」は物語において最後にあらわれるこの箇所に至って一段とその色を強めるのであった。

大尼君が絶えず咳をしていることが三度にわたる「しはぶき」によって表現されていた。そして、この三度目の「しはぶき」は、波線部の言葉のように浮舟が誰だか認識できないでいるのだが、

「……ここに月ごろものしたまふめる姫君、容貌はいとときよらにもものしたまふめれど、もはら、かかるあだわざなどしたまはず、埋もれてなんものしたまふめる」 (手習 ⑥三三一)

と大尼君は直前の場面で浮舟の存在を認識している発言をしていたのであり、目を覚ました直後とはいえ、波線部もやはり老いの衰えと無関係ではあるまい。

永井「一九九五d」は、若い浮舟の心理的に切迫した眼からとらえ直された時、大尼君の老いのある面が不気味な面をあらわにするのと述べる。浮舟の性格という面も考慮する必要があるが、浮舟の眼を通じて、大尼君の老いのうち、いかなる面がどのように捉えられていたか。言い換えれば、具体的に老いのどの面に注目してそれがどのように語られていたのかといったことを正確に把握する必要

があるだろう。その点において、繰り返して使用されながら他の老いの表現と繋がっていく「しはぶき」がやはり注目されるのである。大尼君は八十歳という具体的な年齢に言及される人物であって、当初から老いが意識される人物であった。『源氏物語』の登場人物で年齢が明示される人物で最も高齢の人物において「しはぶき」が繰り返される。そして、繰り返されることで、老いを象る「しはぶき」は、より一層強い老いをあらわすものへと変化していた。声とは直接関係しない箇所でも、しかも大尼君の眠りを妨げるものとして咳が語られており、老いと「しはぶき」がより強い形で結びつき、場面を展開させているのである。

ここまで、『源氏物語』にあらわれる老いの「しはぶく・しはぶき」を確認してきた。それぞれの場面において、老人の登場が必要とされる状況であり、老いが場面の構成と展開に大きくかかわっていた。

再度各場面を確認すると、「しはぶき」をする老人と出会う人々が、その「老い」に対して、あるいは「老い」を通じて何らかの感情を抱く人々であったことも見えてこよう。光源氏は女五の宮の老いに滑稽さを感じ、惟光は老いた女房を通じて末摘花の住む邸に同情の思いを抱いた。冷泉帝は老僧だからこそかつての密通事件にリアリティを強く感じ、浮舟は大尼君の老いに恐怖したのであった。これらの感情が生じるということは、若い人、もしくは老いるにはまだ早い年齢の人々にとって、老人が異質なものに感じられたというこ

とである。若々しく、高い位にいる光源氏からすれば、直接老人と会話をする機会は多くはないだろう。ましてや源典侍のような高齢の尼となるとなおさらである。惟光にしても、光源氏が既に非常に高い位についていたのだから、零落した邸に残された老女房のような人物と話すことはほぼなかった。それでは、夜居の僧都は冷泉帝にとつていかなる異質性を有していたかと言えば、やはりこの僧もかなりの高齢であり、既に自身の後生のための勤行のために籠っていた人物である。世から離れた人物だったのである。このような人物だからこそ藤壺密通事件という今まで内密にされていたことを語るのであり、その語る内容そのものが、宮中の中心にいる冷泉帝にとつて異質なものであった。そして、物語も終わりにさしかかって、物語で具体的に年齢が言及される人物として最高齢の大尼君の傍で若く美しい浮舟が臥すという状況が生じ、若さと老いという対照性が最も強い形であらわれ、浮舟は老いた人物たちの空間で安らぐことができないでいたのである。

これらの場面に見られる老いの異質性から生じる感情は、まず老いの「しはぶき」で明確に老いが象られるところから始まるのである。この「しはぶき」に老いを象る役割があったからこそ、合図という明確な意図を持った場合を除いて「しはぶく」という語が使用されるのは、老人に限られたと言えよう。他の作品では老いに限定されない「しはぶく」・「しはぶき」が、『源氏物語』では使用される対象が限定されることによつて、言葉と連動する形で老いの領域

が作りあげられていたのである。

## 六 おわりに

——「しはぶき」による老いの象り——

『蜻蛉日記』や『枕草子』の表現からは、西暦一〇〇〇年前後もしくはその数十年前において、声を整える、もしくは病から発せられる「しはぶく」という語は、老人に限らず様々な人々に使用されていたことが分かる。また、『源氏物語』においても、光源氏が「しはぶき病」と述べるように、若い人も病によつて咳をすることがあるということには言及されていたのだが、そのような病としての「しはぶき」が発せられる箇所はなく、合図の意味としての「しはぶく」を除けば、ほぼすべての「しはぶく」は老人により発せられるものであった。老いを物語で効果的に語る際に、その最初に「しはぶく」を使用し、周囲の言葉と連動させながら老いを明確に象っている場面が『源氏物語』には複数見られた。老いを明確に象る語としてほぼ老人に限って特定の語を使用するというところであり、「しはぶく」という語が老いのカテゴリーの輪郭を際立たせるものとして機能するのである。語りの話術というべきものが見られると言えよう。

また、「しはぶく」がその周辺の老いに関する語と結びつくように語られ、老いが強く印象づけられる様相も確認できた。逆から見

れば、「しはぶく」がその周辺の老いの表現を支えているというこ  
とでもあり、「しはぶく」は、物語世界で老いを象る語として機能  
していたということである。そしてまた、そのように明確に象られ  
た老いは、各場面において、その老人に対する人物にとつて、日常  
接するものとは異なる類のもので、異質性を有するものであった。

それらの異質性こそが、たとえば、女五の宮の老いが過ぎ去った時  
間を浮かび上がらせて、朝顔の姫君の求婚拒否の論理を支えていた  
ように、物語の展開と深くかわるものであった。これもまた逆か  
ら見れば、物語において老いが重要になるところだからこそ老いを  
明確に象る語を使いつつ、老いを強調したということである。表現  
と物語の展開とが不可分に結びつきながら物語は進行していたので  
ある。

老いを象る語として本稿では「しはぶく」をとりあげたが、「い  
びき」、「ひそむ」なども興味深い問題を有していると思われる。い  
ずれ考察をしていきたい。

#### 注

(1) 身分への意識という点では、夕顔巻で光源氏が夕顔の家で明け方を迎え、  
隣家の声が聞こえてくる場面(夕顔 ①一五五―一五六)が興味深い場面  
として挙げられる。高貴な光源氏の認識に沿って、身分の低い人々の声が  
聞こえるような所に住む夕顔が、そのことを「いかなることとも聞き知り  
たるさま」でないことを、「なかなか恥ぢかかんよりは罪ゆるされて」と  
捉えられている。身分意識を前提にした場面である。さらにその直後に、

身分の低い者たちの生活のような猥雑なことは「くだくだしきこと」とし  
て、省略をことわる草子地が見られる。語り手と聞き手との間、もしくは  
対読者意識のレベルにおいての身分を意識した語りということであり、作  
中世界の身分意識を包みこむように語りの世界の身分意識が表出している  
のである。

(2) なお、佐藤「一九八六」は、神官については祝詞をあげる際に咽喉を整  
えるために「しはぶき」をしていると述べている。

※『源氏物語』の引用本文は、阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校  
注・訳「新編日本古典文学全集20 源氏物語①」(小学館、一九九四)と「新  
編日本古典文学全集25 源氏物語⑥」(小学館、一九九八)に依拠し、適  
宜『源氏物語大成』(中央公論社、一九五三―一九五六)を参照して表記  
などを改めた。傍線等は論者による。また、本文の最後に付した( )内  
に、巻名および新編日本古典文学全集の巻数とページ数を記した。

※『源氏物語』以外の引用本文は次のとおりである。なお、引用の後の( )  
内に各書籍のページ番号と、巻名などがある場合はその巻名を付した。ま  
た、傍線等を適宜付した。

『蜻蛉日記』：菊地靖彦・木村正中・伊牟田経久校注・訳「新編日本古  
典文学全集13 土佐日記・蜻蛉日記」(小学館、一九九五) ↑ただし、  
「咳」を「しはぶき」に改めた。

『うつつは物語』：室城秀之校注「うつつは物語 全」(おうふう、一九九五  
年)

『枕草子』：松尾聰・永井和子校注・訳「新編日本古典文学全集18 枕  
草子」(小学館、一九九七) ↑ただし、「人映え」のみ校訂した。

#### 【引用文献】

池田 勉「一九七八」『光源氏における老年の意識について』『成城国文学  
論集』一〇

- 大胡 太郎「二〇一九」〈「古い人」という言説 言説化される〈古い〉人種化される〈老人〉——』『日本文学』六八一—五
- 菊地 仁「二〇〇二」〈「古い」の表象——『国語と国文学』九四—
- 小嶋菜温子「一九九五」〈「古い」の身体と罪・エロス——藤壺・光源氏』『源氏物語批評』有精堂出版↑初出は一九九四年
- 佐藤 良雄「一九八六」〈「源氏物語」における「しはぶき」と「こわづくり」——『音声学会会報』一八二
- 重松 信弘「一九八三」〈「古い」の年齢——『源氏物語研究叢書V 紫式部と源氏物語』風間書房
- 清水 好子「一九六七」〈「藤壺宮」——『源氏の女君』塙新書
- 外山 敦子「二〇〇五」〈「雑音」としての『声』——老女の『声』を中心に——』『源氏物語の老女房』新典社↑初出は二〇〇一年
- 外山 敦子「二〇〇八」〈「古い」の言葉——『王朝物語のしぐさとことば』清文堂出版（糸井通浩・神尾暢子編）
- 永井 和子「一九九五a」〈「序論にかえて——非在者としての老人」』『源氏物語と古い』笠間書院↑初出は、一九八二年
- 永井 和子「一九九五b」〈「源氏物語の「おいびと（老人）」——ことばの意味するもの」』『源氏物語と古い』笠間書院↑初出は、一九九〇年
- 永井 和子「一九九五c」〈「源氏物語における老若——女五の宮を中心に——』『源氏物語と古い』笠間書院↑初出は、一九八二年
- 永井 和子「一九九五d」〈「源氏物語の老人——横川の僧都の母尼君」』『源氏物語と古い』笠間書院↑初出は、一九八六年と一九八八年
- 増淵 勝一「二〇〇四」〈「古いのいろいろ」』『並木の里』六一
- 鷺山 茂雄「二〇〇六」〈「朝顔」——少女の桐壺院姉妹——老女宮の役割をめぐって——』『平安文学の語りと主題』武蔵野書院↑初出は、二〇〇三年